

古代敦賀津と松原客館について

川村 俊彦（敦賀市教育委員会）

はじめに

越前国の南端に位置する敦賀は、近江を介して畿内方面と交通する海陸の要衝であった。古代敦賀津と対外交流を考えるとき、看過できない課題として、渤海使節を迎接した松原客館がある。ここでは、この松原客館をめぐる研究の現状と課題について紹介しておきたい。

創設時期と停廃時期

松原客館の成立については、以下のことからおよそ9世紀前半頃ではないかと推定される。

渤海船は、8世紀半ば、頻繁に日本海側諸地域に来着したため、延暦23年（804）、能登客院造営の勅が出されている。また越前国では、弘仁6年（815）、蕃客の乗用に供するため大船の徵發が発令されている。なお、これに先立って敦賀津の整備を窺わせるものとして、天平神護2年（766）、近江国の近郡から稻穀5万斛を松原倉に運び入れ貯蓄されたことが挙げられる。

松原客館の終焉については定かではない。延喜19年（919）、若狭国丹生浦に座礁した渤海使一行105人を越前国松原駅館に移送している。また、長徳元年（995）9月6日、若狭国に来着した宋の商人・朱仁聰ら一行70余人を定めの通り越前国に移したとあり、康平3年（1060）にも林表、候改、承暦4年（1080）に孫吉忠等、宋商の来津が記録されている。駅館という表記から駅家との関連が見られるし、渤海の滅んだ後も通商施設として存続していたらしいことが解る。

松原客館の所在地について

松原客館の候補地については諸説あり、未だ決定打を見ない。これまで数箇所の比定地が提起されており、主なものを列挙すれば、①別宮神社附近（櫛川遺跡）一帯、②松原遺跡、③西福寺、④来迎寺及び永建寺附近一帯、⑤旧神明社所在地、⑥氣比神宮附近、⑦中遺跡及びその周辺、等が挙げられる。（図1参照）

第一次越前国府敦賀説

近年、敦賀津をめぐる論考として水野和雄氏による第一次越前国府敦賀説がある。これは、奈良時代から平安時代前半までの越前国府を現在の敦賀市長沢附近に想定し、したがって敦賀津を国府津と位置付け、それを基軸として愛発関、敦賀郡衙、松原駅家、松原客館等を、相關的に俯瞰しようと試みた論考である。水野説の当否については今後、大いに検討を加えられるべきであろう。

おわりに

敦賀市においては、当地を日本海諸地域と畿内との通交の要衝であるとしながら、古代敦賀津をめぐる研究は遅滞していると反省せざるを得ない。歴史学や歴史地理学の成果に対して、未だ発掘調査例が乏しく、考古学から提起できる資料が限られていることが一因であるが、調査を進めるべく努めていきたいと考えており、今後の調査成果の蓄積を待たれたい。

参考文献

- 1 鈴木靖民ほか1994『松原客館の謎にせまる—古代敦賀と東アジア』氣比史学会編
- 2 水野和雄1999「越前敦賀の復権—越前国府・愛発関・敦賀津・郡衙・松原駅・松原客館等の官衙」『紀要』第14号
敦賀市立博物館

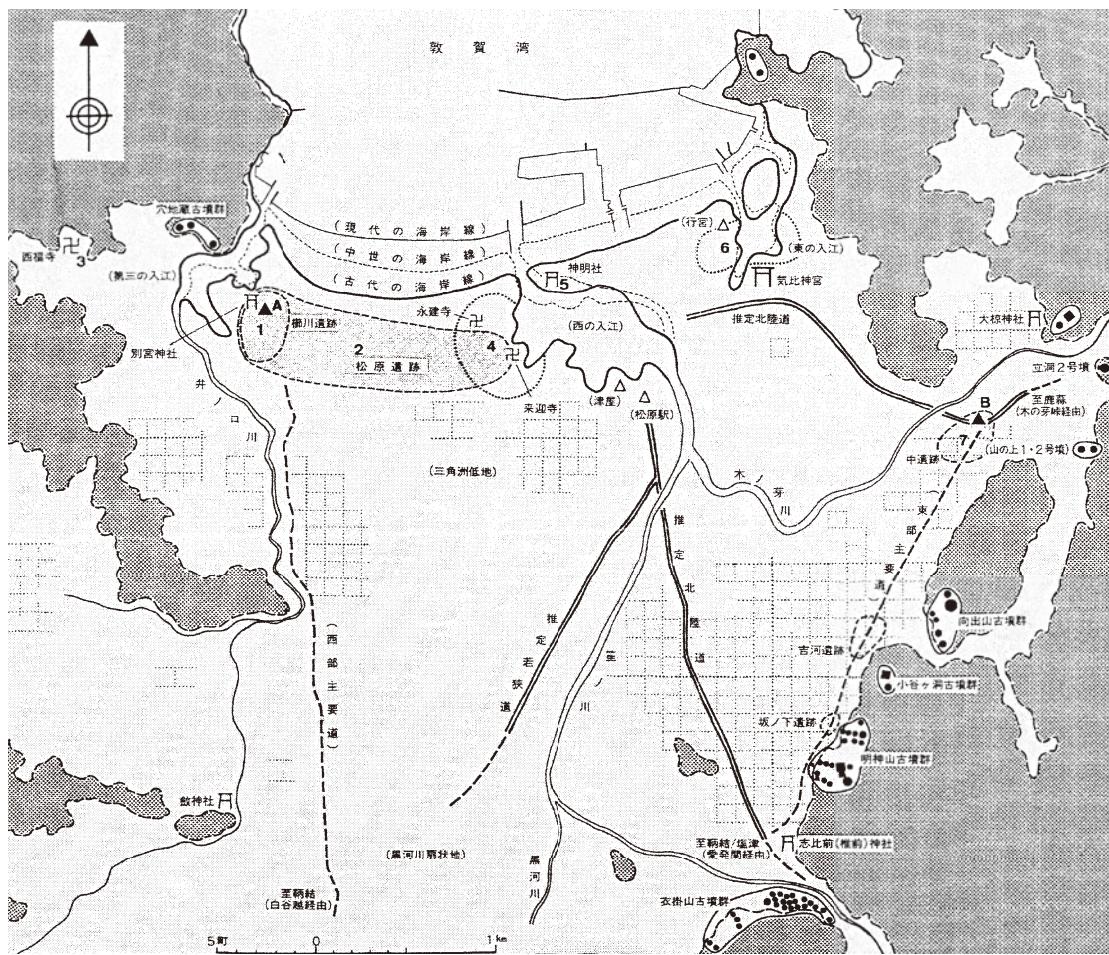


図1 松原客館推定候補地関係図（文献1より）

図1 凡例

- 1 別宮神社附近一帯 平安時代の祭祀遺跡を中心とする遺跡群。気比神宮の主宰する焚火儀礼の祭祀遺跡と見られる。
- 2 松原遺跡 古墳時代から平安時代に亘る複合遺跡群。製塩遺跡を主とするが、範囲内の各地で皇朝銭や須恵器が出土。
- 3 西福寺 縁起によれば、開創のとき土中より和同開珎133枚及び銀の匙・鈴等が出土したと伝える。
- 4 来迎寺及び永建寺附近一帯 西の入江に近い浜堤上に当る。
- 5 神明社旧所在地 近世に松原客館跡地であると伝承される。
- 6 気比神宮附近一帯 東の入江に臨み、気比社を管掌するにあたっての最適地である。
- 7 中遺跡及びその周辺 平安時代の石帶を含む多量の遺物が出土しており、官衙の所在が想定される。

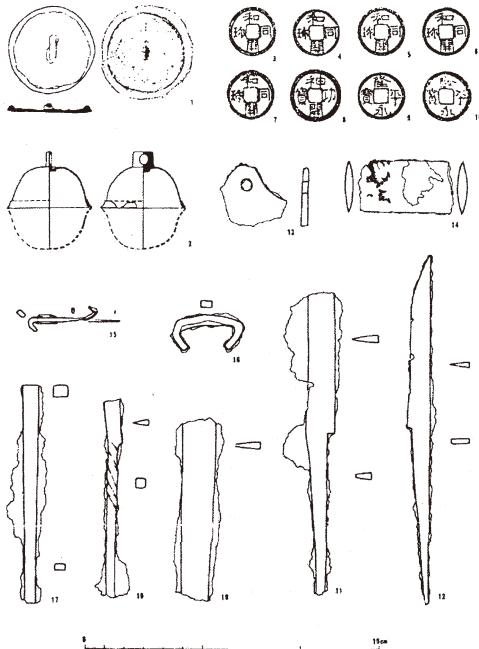
△古代施設推定地（南出真助氏推定による）

▲平安時代主要遺跡

A 櫛川祭祀遺跡 B 中遺跡



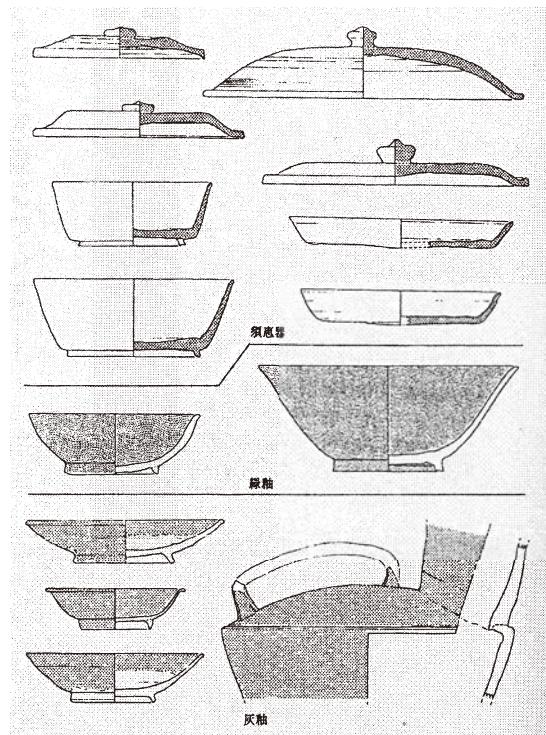
図2 近江越前国境の交通路（文献1より）



第11図 別宮神社周辺出土遺物実測図(1:銅鏡、2:銅鋒、3~10:銅鏡、11・12:刀子、13~18:その他)
(*福井県埋蔵文化財調査センター作成図を用いた)

(『松原遺跡』敦賀市教育委員会 1989 より)

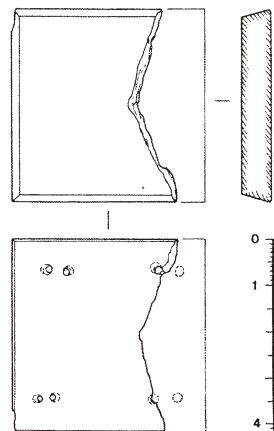
櫛川遺跡（別宮神社前）出土遺物



中遺跡出土遺物



気比神宮



中遺跡出土石帶



中遺跡遠望



別宮神社